

刊我  
自

嘉永明治年間錄

卷十三下

			五	和
			二	書
			七	門
			二	
二	五			
冊	架	函	號	類

庫	文	閣	內	
五	五			和
〇	二			書
二	七			
四	二			
架	冊	號	類	

內閣文庫		
番號	和	5272
冊數	20 ( 15 )	
函號	150	169





嘉永明治年間録卷之十三

吉野眞保篇輯

常野兩州騷亂之記

水府ノ浪士常州鹿島根本寺ニ屯集ス

常州水戸藩先年來二派別れ一ハ武田伊賀田丸稻右衛門等首領にて黨を結ぶ人

是を天狗連と云ふ又一黨をハ天狗連の者呼で奸物と云ふ其二黨の間兎角睦しか

らざりしが今茲元治元四月お至り天狗連の者共同國小栗村にて隊伍を整へ近郷

近國を横行し攘夷鎮港を名として富有の者へ金策を申付諸人は是を爲す難儀いふ

計りなし是より先故源烈公農兵引立の爲め領内所々へ文武教導館立置れたる所

彼の天狗連の者共其稽古場を屯所となし攘夷の誠心金鉄の如しと云ふ意にて誠

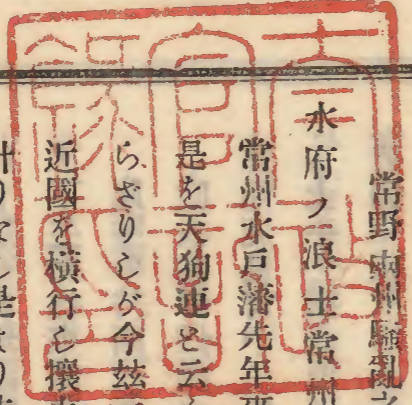
心組又ハ正義隊など唱へ猛威を示し四方無頼の徒を招き或ハ良農を徒黨引

入しガ自然産業を失ひし者共次第お相増し就中潮來村お潮來館と唱へたる館へ

屯集の者去る文久三亥年秋佐原村へ馳向ひ亂妨を働き近郷の人民等の難澁いふ

計なし然し此處の地頭津田英次郎小身にて警衛行届間敷命令を以て佐倉侯是より

替る其後誠心組の浪輩富田村一條寺鹿島郡下生村根本寺等へ引籠り神武館正義



嘉永明治年間録卷之十三 甲子 一 誠心組



隊當分屯所と認めたる大なる棒杭を建て門の内外に幕を張り猛威を示し近郷富家の者共へ攘夷軍用金と唱へ金銀米穀或は夜着蒲團刀鎗鉄砲等掠取り就中鍛冶職の者と呼ばれ日々刀鎗杯を鍛錬せしむ今茲子の春は相成り神武館屯集の者共多人數にて各槍を立させ常州鹿島郡廻村と唱へ村々人別を改め願筋等有之向ハ神武館へ可願出旨相達し剩へ汲上村東福寺化徳院の外所々の本尊佛像等致破却鹿島の大堂と云ふ釋迦堂を焼拂ひ丈七尺餘の銅佛を打碎き捨札を建つ其文ハ天誅を加へ地蔵賊いたしむもの可爲同罪事

又下生村往來路の傍ハ佛像の首九ツ首臺へ乗せ晒し置たり其捨札ハ云

此ハの共西戎の醜類にして入朝以來庶民を惑し夫耳ならぬ數多の姦僧をして暖衣飽食姪逸ならしむ依之攘夷の手始として天誅する者也

此節鹿島宮中の地へ繩張を致し神武館を新築すと云ひ近郷村々へ夫役申付四方ハ土手を構へ地形いたし金銀材木それハ富有の百姓を見立て申付る依之此邊の困難限り無し

鹿島根本寺屯集ノ賊徒退散ス

御勘定奉行木村甲斐守より水戸家へ後達の趣 頃日鹿島郡近邊へ惡徒共多人數

屯集致し百姓共へ強談申掛け金銀等掠取ハ趣相聞え右ハ領分最寄付早々召捕可被成との後下知ハ付水戸役人より小川館潮來館へ相達し此兩館人數五十人宛三月三日神武館へ押寄たる處最早此時領分ハ云ハ不及黨類荒増引拂ハ僅ハ士分七八人雜人十四五人召捕り潮來館へ引取入牢す依て鹿島郡ハ先づ安堵と云

巷説右の如く後勘定奉行より水府役所へ達し有之處水府役所ハ天狗連の者多く有ハ依て神武館へ内通し引拂ハせ手筈よき時分小川館潮來館へ公然と相達し兩館の者神武館へ討手ハ向ハし虚空館同様の有様なりと云

夫より漸ハ水府領内所々館々ハ云ハ不及其外所々へ浪士と唱へ屯集の者起伏興敗ハ水府當時勤仕の族内々機關するハ依て其横行自在にて勢も亦盛なりと云その密ハ機關するの頭取ハ水戸住居にて岡田信濃守江戸屋形にてハ老中職と唱ふる武田伊賀守耕雲齋 同老中職在京大場彌右衛門一心齋 右三人鼎足の如く互ハ内通天狗組を指揮すと云ハ水藩天狗連と雖も勤役の者ハ表向知らぬ顔にて内々所々屯集の者を指揮せしが此ハ至りて勤役の者も同黨と成り筑波山護持院ハ在る處のハ紋付の幕杯取出し表向夷人掃攘報國忠士と唱へ是より日光山へ押出さんと今茲子の四月同國小栗村にて隊伍を整ふ



水藩並ニ浪士隊伍ヲ小栗村ニ整フ

水藩並ニ浪士姓名

大將 田九稻右衛門 補翼 齋藤佐次右衛門

○總裁 藤田 小四郎 ○監察 田中 源藏 川俣茂七郎

内藤文七郎 館林 茂十郎 常井 廣松 大久保京助

室町武三郎 黒澤 新七郎 中山小三郎 溝口 多平

吉田 藤藏 島村文右衛門

○遊軍總轄 山田 一郎 戸田 彈正 竹内百太郎

岩谷 武志

○總隊長 片岡爲之丞 沼田準次郎

○隊長 須藤敬之進 木村 六郎 樫村誠一郎

前田俊之丞 北條時之助

○伍長 田村露一郎 飯田 群藏 大幡 内記

畑築山 木村久之進 田島 裁彌

○使番 檜山三之助 小林 幸八 渡邊 剛藏

豊田彦之丞 渡邊 主殿 池尾岳太郎 小田熊太郎

鳥田 虎吉 梅村直一郎 千葉小太郎

○調練奉行 山田 一郎 戸田 彈正 小林 幸八

石田 總助 朝倉 友信

○書記頭取 服部 本英 水田 鎌二 榮 清左衛門

眞家源右衛門 松延忠四郎 石橋榮次郎 松脇清右衛門

後藤裏次郎

○小荷駄奉行 長谷川勝七 室町稻太郎 初島 平司

大石重太郎

右之外姓名百人餘畧之

水藩並ニ浪士旅宿ニ就テ日光街道石橋宿ヨリ届書

乍恐以書付係届奉申上ハ當御代官所日光道中石橋宿役人惣代問屋新右衛門奉申  
上ハ水戸田丸稻右衛門様當月四日小栗村迄出立にて宇都宮宿泊の係先觸ハ係  
座ハ處俄ハ同日當宿泊相成リ同勢百七十人餘係本陣其外下宿五軒表門ハ  
白地御紋の係幕張玄關ハ紫御紋付の係幕内玄關ハ白無地の幕下宿の内山



田一郎様木村久之進様白無地の幕張着の砌行列の眞先は切火細鉄砲左右二十挺程外は種ヶ島所持の者六七人槍二十一本長刀二振中央は從二位大納言源烈公神輿と申す札を相掛ひ白木の揚輿何れも白丁にて人足は持せ鞍置馬三疋牽き其外鞍置馬六疋宿方より差出し荷物の儀は長持一棹凡九十貫目位乗物一挺引戸駕籠一挺垂駕籠四挺は輿其外分持四荷宿駕籠四挺人足五十一人馬十二疋不殘賃錢は拂にて其餘四十九人鎗鉄砲笠持手代り等無賃にて差出し田丸稻右衛門様山田一郎様木村久之進様其外は同勢何れも白胴着にて袴を懸け割羽織袴着用中間体の者一人も無之不殘白木綿にて致鉢巻陣笠を冠り帶刀にて鉄扇或は鉄棒を持ち行軍録と申す帳面を所持百七十人參り内全く士体の者八十八人位其餘は俄雇頼入の体は相見え申ひ孰れも旅宿中權威を振ひ同五日當宿出立にて宇都宮通り大澤宿泊りの先觸差出し申ひ尤も旅籠料一人は付銀二匁五分外は辨當八分都合銀三匁三分は拂ひ座の間此段は訴申上ひ以上

當御代官所日光道中石橋宿

元治元子年四月八日

役人惣代問屋 新右衛門

福田所左衛門様 御役所

水藩士並ニ浪士日光山ニ參拜ス並ニ大平山ニ屯集ス

水藩並に浮浪の徒石橋宿出立夫より日光山東照宮へ參詣夫より同國大平山へ屯集し近郷富有の者を日々呼出し攘夷軍用金と唱へ強談を以て金穀を出さしめ或は二十人三十人宛四方八方へ手分して金策をなし自己の意は叶はされば或は切捨又は居宅へ火を懸け其威を示す此頃掠奪金凡そ万を以て數ふと云ふ此故を以て日光は固め被仰出諸役人多く發足す

水藩市川三左衛門等江戸邸ニ着ス武田伊賀蟄居ヲ命セラレテ水戸ニ歸ル

于茲水藩弘道館書生天狗連の者呼て奸物と云ふ市川三左衛門朝比奈彌太郎初め其外の面々天狗組の亂妨の處置を見るに忍びせと雖も水府君公より何等の沙汰も無し依て一同奮發し五月廿五日常州水戸千束原に於て勢揃したる面々に家老市川三左衛門同佐藤圖書城代朝比奈彌太郎是を水府の三大夫と云を初め弘道館書生惣勢七百人餘各得物を携へ同晦日江戸小石川館へ着し其申立の大意には當家藩の内誠心組等と唱へは徒共野州大平山其外所々屯集致し民家を放火し無罪の者を誅戮し先君の木主を主とし攘夷を名目として農民の金銀を掠奪し日々惡逆増長君命を辱し

新刊千利書卷十三 甲子 四 我臣千利書



ひ依之暴徒共追討仕度段水府侯へ申立つ右ふ付侯より取調の上第一老中職と唱ふる武田伊賀守中山與惣左衛門岡田信濃守其外實ハ天狗連ヲ組せる者大勢咎申付られ武田伊賀守ハ國蟄居と成る此時江戸詰の役人共多く役儀を被取放此度出府の朝比奈彌太郎老中職ハ申付られ其外の面々役儀昇進せりと云

大平山屯集ノ徒結城城下ニ迫ル

野州大平山屯集の賊徒同所を出立シ道中筋ハ枋木小山結城下館志筑へ引移趣を以て宿々人馬差立置可申の旨先觸を出シ六月二日早朝より貝鐘太鼓を鳴シ拔身の刀鎗を携へ大勢結城城下へ押寄せ城下町三丁目より軒下へ燃草を積重ね放火の模様其外騎馬武者大勢結城の城門前へ押寄る依て城主水野日向守家來出張同所大輪寺ハ於て應接せし處浪人共より強談の趣ハ日向守城を明渡し共攘夷軍用金貸呉れ共挨拶承り度旨難題申懸たれ共遂ハ談判行届き重役の者下館迄案内致す可き約束にて事濟翌三日下館迄案内として結城侯家來水野主水高木順次兩人差出したる處模様替と成て小山宿へ曳返シ其夜同所泊りにて夫より壬生城下へ押寄たる處鳥居侯にハ固め嚴重ハして近寄る事不叶浮浪の徒大ハ威を失ひ夫より枋木町へ曳返せり

暴徒火ヲ枋木町ニ放ツ並ニ筑波山ニ屯集ス

斯て賊徒共ハ猶又枋木町へ操込同所富有の者へ先達て申付置ハ攘夷軍用金此度早々上納可致旨催促ハ及びし處彼等壬生にて威を失ハし故最早當地をハ近々曳拂ふべき模様を察シ富有の者一同申合せ程よく日延申入日送せし處浪人共大ハ立腹シ六月六日の夜放火ハ及び同所下町邊凡三百軒餘焼亡シ死する者二十人餘と云夫より暴徒等ハ諸川通り下妻へ懸リ筑波表へ一同曳込たり然るハ結城侯の家來も其儘附添居る趣にて侯大ハ心配の由猶又筑波表より攻來るの風聞頻りにて結城下館下妻其最寄の武家農家商家共薄氷を踏ガ如くの思ハをなシ川々の橋を取拂ハ日々夜々固め居リ大騒動ハ計なし

幕府諸役人常野屯集ノ賊徒追討トシテ江戸ヲ發ス

公邊より浪人共追討として御使番よて御目付格爲御目代永見貞之丞同小出順之助三番町歩兵同差圖役其頭ハ北條新太郎西丸下歩兵同差圖役其頭ハ城織部大筒頭並組共其外役々の者又水戸侯よりハ市川三左衛門を大將として弘道館書生三百餘人相添都合惣勢凡三千八百餘人六月廿五日廿六日追々發途結城着泊り夫より日々滯留の由高崎城主松平右京亮人數二千餘人小山間々田兩宿へ着滯留の由其外係



目代永見貞之丞下知次第にて可操出と相招待居る宇都宮勢百餘人小山邊迄出張  
壬生勢ハ山川陣屋迄三四百人の勢を操出し扣居る結城下館ハ猶更差圖次第操出  
しの積り勢揃して日々城中ハ相扣居る然るハ目代より何の差圖も無く出陣も無  
く日々徒らハ結城町ハ三四千人止宿滞留其外近在所々關東取締出役人足引擧げ  
雇置し旨ハ付在町共混雜一方ならざりしが漸く七月五日より二手ハ分ち一手ハ  
下館一手ハ下妻へ同六日七日と追々結城町を不殘出陣ハ成る

官軍賊ト小見川ニ戦フ今夜賊徒下妻官軍ノ陣ヲ襲撃ス

下妻へ發向の官軍同七日小見川の水南へ出陣す水北高道祖村へハ賊徒出陣川を  
差挟んで砲戦ハ及び双方手負有りと雖も竟ハ賊徒敗北ハ高道祖村屯所へ引擧る  
寄手の勢も下妻へ引揚滞陣ある内高道祖村賊勢の内木戸村飯田群藏と云者下妻  
の地理を知れるを以て郷導とし二百餘人同九日曉七ツ時頃下妻へ押寄せ先ハ目  
代永見貞之丞本陣多寶院へ火矢大筒を討懸たる處一時ハ燃上り永見氏初め多寶  
院詰合の者一同狼狽或ハ死亡又ハ散亂す同所田町通り水府勢陣所も同様燃上り  
戦争ハ相成り双方討死多く追々浪人勢引揚け討手勢も此處彼處ハ馳せ集り夫よ  
り結城城下へ引取り十日より十三日迄滞留す此地の者案るハ定て休息して尙又

追々出張ある事と見込居たる處也ハ止戦ハ相成難き趣を以て十四日十五日兩日  
ハ追々歸府の由にて引拂と成る此ハ於て此地の者共案ハ相違し頼みハ思ひし討  
手勢不殘歸府にてハ又浪人勢何様の所業も可有之哉と諸人驚き力を失ふと云  
目代永見貞之丞下妻ノ夜襲ニ恐怖シ糧ノ乏キヲ名トシテ江戸ニ歸

ル

斯て御目代永見貞之丞討手勢一同日光道中を曳返し討手勢一同ハ大澤越ヶ谷兩  
宿へ止置下知有之迄滞留すべき旨申渡し十七日永見貞之丞歸府彼地兵糧無之止  
戦相成難き趣を申立と云

此時同氏の廐中間の物語ハ去る九日曉焼討を懸られし節ハ實ハ一同狼狽言語  
ハ絶し私なきハ法被一枚振り珍寶にて裸馬ハ打乗り主人杯思ひも付き無二無  
三ハ逃延少し心の落付て後ハ主人ある事と思ひ付夫より家來ハ主人を尋ね主  
人ハ家來を尋ねて漸く主從落合ハ處主人方にてハ同様馬も家來も思ひも付  
き褥の中より飛出し辛く逃延ハ由依之叱られハ程の事も無く夫より在處の神  
前ハ懸け有ハ鉦の緒の白木綿を外し私櫃鼻禪ハ用ハ來り今尙斯の如しと見せ  
たるよし聞たり



藤澤某賊徒追討ノ旨趣ヲ閣老ニ建言ス

是より先歩兵頭藤澤某結城より立戻り建言の趣浪人討手仲を蒙り結城城下迄出張情軍勢を見渡し處第一軍ヲ將帥無之何を以て進退賞罰を以て可辨別哉次ハ兵糧不足ヲ見受ハ付拙者立戻り御注進申上ハあの様にてハ迪モ軍事ハ相立申間敷ハ人撰にて早々將帥ハ差遣シ兵糧ハ廻シ可然趣懇々申立たる處御用部屋ハ評議ハハ彼ハ何角毎度存寄を申述べ險惡人物なレハ拜領物にてモ致させ欺き追返シ可申とて翌日御用の趣を以て被召シ付藤澤氏ハ右申立の御挨拶なるべくと登城セシ處案ハ相違シ御前ハ三所物拜領仰付られたりければ是ハ存外の事にて私儀今般拜領物を致シ度て立戻リハ儀ハ無之將帥兵糧の儀にて注進ハ罷越ハ儀ハ有之と云て拜領物を直ハ押返したりと云ふ依之上を恐れざる致シ方とて役儀召放さる

武田伊賀水府ニ於テ猛威ヲ振フ

是より先武田伊賀ハ先達て國許下向後慎み無之却て諺ハ云虎を千里の藪ハ放セシ如ク勢ハ盛んハシテ其黨類ハ岡田信濃守山國喜八郎鳥居瀬平大久保甚五右衛門柳原喜右衛門野中三五郎大田原傳内向井緋部綿谷五郎岡部豊平三木佐大夫

福野政太郎同勝右衛門里見四郎左衛門富田三代之助門谷勝次郎杉浦勝之助林良助長谷川光之助村島萬吉ハ谷民藏三好保之丞飯田宗藏右何れモ持高千八百石より二百石迄の者右の外百石以上以下六百人餘其姓名畧之この餘諸國の浪人ハ三百餘人武田伊賀ハ猛威を以て四郡奉行へ下知を傳へ天狗連ハ與せざる者ハ誅戮ハ行ふべきと云觸シ其威ハ恐怖ハ多く武田伊賀ハ屬ス此時人數凡ハ三千五百餘人と云

水藩武田伊賀ノ黨出府市川三左衛門等ヲ疾ニ讒ス疾コレヲ容テ市川等ニ國蟄居ヲ命ス

斯て武田伊賀ハ指揮ハ依て大勢水戸街道小金宿邊へ押出し屯集して攘夷鎮港を水府公へ申立シを公ハ大ニ立腹シ攘夷鎮港ハ公邊の御處置其方共論ざる處ハ非モ早々可引拂旨下知を傳ふと雖モ更ニ其命を奉ぜ日々賊徒を増シ追々江戸表へ操出し小石川館駒込小梅三邸並ハ市中迄止宿シ居リ天狗組の内藤田大久保柳原其外頭立たる者より三大夫朝比奈彌太郎佐藤圖書へ應接シ水藩の内報國誠心の者家を忘れ妻子を棄て四方ハ奔走して攘夷を企て日々心痛罷在ハ各方にも君公へ攘夷の諫言をも可申上筈の處却て報國誠心の者を賊徒と唱へ君公へ讒



言致し報國誠心の者屯集の大平山筑波山等へ市川三左衛門を先隊として追討の人数を差出し杯何等の心得を以て取計ひ哉と強談及び此處朝比奈彌太郎佐藤圖書辨論數刻及び此ヶ衆寡敵せざるを察せしにや又深謀有りてにや兩人是迄の取計ひ心得違ひ今日より慎み可罷在旨挨拶及び夫より兩人共引籠慎み在此處尙また天狗組より君公へ種々申立お朝比奈彌太郎佐藤圖書市川三左衛門等の輩の國家の奸物お付御國許へ蟄居被仰付可然旨云欺さしお水府公又是を聞受け彼三大夫を國元へ蟄居申付る

水府藩士太田道淳ノ江戸邸ニ追ル

從是先六月十四日水府の天狗連五十人太田道淳殿屋敷へ罷越天狗連より申立の大意の先般於大城夷人掃攘と浪人追討何れを先お可致哉の旨衆議有之此處水府中納言曰浪人の不及追討彼等の攘夷を心根よ盡し居る輩なれば攘夷の先陣お使ひ早々攘夷鎖港決議談判可致旨迄演説ひ得共老中方決し兼彼は延日お罷成内水府國元より朝比奈彌太郎其外奸物の徒出府致し中納言へ浪人追討可致旨致讒訴ひ得共既お此時中納言殿に先達て於大城斯々の決議演説お暨ひ上成難申談由申せしを奸物共惡謀を以て御當家へ申入道淳殿に天下御政事相談相

手と申廉を以て小石川屋敷へ參られ中納言を申掠め夫より老中方へ申入其後數度往返致し中納言並お老中を欺惑し報國忠士の屯集致居る大平山筑波山等へ追討人数差出し儀皆道淳殿の處置と承りお付何等の存寄を以て右様の取計ひ被成ひ哉道淳殿へ面會議論可決旨申入と云ふ依之家老共恐怖致し道淳儀病氣お付面會相成兼殊よ右様の致取計ひ覺無之旨相斷ひ處天狗連大お立腹致し右様眼前處置致置ながら今日お至り覺え無之旨の非人の挨拶なれば某お人非人の首を刎可申間病氣と有は道淳殿寢所へ案内可致旨手詰の及懸合依之道淳殿家老共股慄狼狽言語お絶し何共挨拶致し兼ひ此後數日道淳殿屋敷へ天狗連五十人餘詰切催促の由於茲道淳殿挨拶の趣各方存意の通り攘夷鎖港急度相決し様老中方へ談判可致ひ間引取吳ひ様との由此時常州野州所々お屯致し居る浪人共日々惡逆增長にて所々放火數十ヶ所及び常陸下野上總三ヶ國農商の金銀を掠奪する事凡十万兩以上と云

市川三左衛門等歸國シテ水府城ヲ守ル

朝比奈彌太郎佐藤圖書國蟄居被申付國許下向の節野州通り相願ひ下妻へ立寄先達て出張致居る市川三左衛門へ致面會談合の上市川等同道にて水府を差て罷下



りの折しも天狗組逸波勢の内田中源藏頭取にて三百余人途中待伏致し居及砲  
 發ひお付双方砲發一戰致し處三大夫へ郷民共致味方源藏方九人討れ敗走すと  
 云ふ夫より源藏の野口村野口館へ引揚屯致居しが近郷の農民蜂起及一戦ひ處源  
 藏敗走の筋金二千兩入の長持を郷民共奪ひ採り水府城中へ差出すと云ふ源藏夫  
 より十師村へ懸りし時鯉淵組と唱へし十七ヶ村の百姓一揆徒黨し源藏又々敗走  
 す併土師村へ被致放火ひ由斯て市川等へ源藏を逐拂ひ水府着城入致し鈴木石見  
 守宇都宮彌三郎伊藤玄蕃其外の面々へ迄談合先中納言奥方眞芳院殿へ當君の御  
 處置天狗組の所業一々申立ひ處眞芳院殿曰先君の木牌を主とし攘夷を名とし農  
 民の金銀を掠取ひ賊徒の勿論其賊徒の中せし事を當中納言殿相用ひとし存外の  
 事と腹立れ當中納言殿の嫡男を主とし籠城可致旨沙汰有之依て國語の諸士へ下  
 知相傳へ大手町口へ朝比奈彌太郎佐藤圖書杉山通りへ宇都宮彌三郎興津能登  
 守其外見附ひ大小砲置付嚴重相固め其外屯集の賊徒追討の評日々衆議あり  
 幕府再々常野兩國ノ賊徒追討使ヲ發ス

從是先野州討手御目代永見貞之丞七月十七日歸府彼地兵糧不足お付止戰相成兼  
 ひ趣申立る依之兵糧米運送今般浪人追討惣督若年寄にて御老中格田沼玄蕃頭大

番頭神保山城守係書院番頭織田伊賀守係小性組番頭井上越中守係持頭和田傳右  
 衛門係先手土屋鈞之丞係徒頭遠山三郎右衛門小十人頭竹田日向守右何れも組共  
 七月廿三日より同廿七日迄追々出立前書大澤越ヶ谷兩宿へ止宿致し居先般の討  
 手勢共田沼玄蕃頭へ附添出立す夫より古河宿着八月朔日より同十八日迄滞留す  
 水府城中より度々援兵を乞ひ依て翌十九日古河宿出立此頃田沼玄蕃頭へ附屬の  
 者凡一万三千余人と云其夜小山宿泊り翌廿日結城宿泊りの處へ水府より市川三  
 左衛門出迎として援兵乞ひ來る下館眞壁と相越し廿二日笠間着致滞留ひ處亦々  
 水府城中より係使として佐藤久三郎早馬にて馳付頻りお援兵を乞ひ依て其後水  
 府弘道館へ着此頃の風評弘道館へ着すと雖も唯双方の戦争を見物致すのみ討手  
 勢手を下し不申因て田沼玄蕃頭大お評判惡しと云

松平大炊頭水府侯名代トシテ鎮撫ノ爲メ水府ニ下ル並ニ水藩大炊  
 頭ノ入城ヲ拒ムニ就テ戦争

從是先水戸中納言殿係名代鎮靜として松平大炊頭八月五日江戸表出立水戸街道  
 罷下處新宿小金邊其外水府天狗連大勢屯致居ひお付右様の所業不穩ひ間早々曳  
 拂可申旨大炊頭申諭せし處天狗組一同承服の趣を以て大炊頭へ附添八月七日大



浦城下通行夫より九日水府城下臺町藥王院へ着す然る處城方にて大炊頭素より天狗組へ荷擔せし人なれり今般天狗組大勢率連ひて假令主命なり共城入爲致なば天狗組の城を被乗取可申然れば城入差留可申旨城方評議一決して使者三人藥王院へ來り大炊頭様一人なれば案内可申ひ得共新宿小金筑波等の屯勢率連被成ひては城人の儀相成不申ひ段相斷ひ處大炊頭大ひ致立腹拙者儀今般中納言殿命令を以て罷下り然るを右様の過言不將成とて右使者二人首刎一人の漸く逃歸る同城下フシカラと云所へ籠城方の一人天野伊豆右の始末を承り直ひ城中へ及注進み付城中より陣大鼓打出を合圖として一貫目の大砲三ヶ所より砲發み及び大炊頭屯所へ砲丸雷の如く飛來る屯勢是ひ驚怖して大炊頭其外城下東栗崎へ遁去る此時大炊頭勢武器並み小荷駄其外棄逐ると云

松平大炊頭封地ノ農民火ヲ領主陣屋ニ放ツ

此節大炊頭領分常州完戸並み近郷の百姓共領主と雖も賊徒み與し首領と相成ひ所業依て國君との難仰趣を以て一揆徒黨致し完戸陣屋放火夫より水戸城へ來り右の始末一々申立以來の貢物書生方へ上納仕度然る上は味方申し賊徒打拂ひ度旨城方へ申入ると云ふ同十日筑波勢水戸下町タマケ橋を境として城方へ市川

三左衛門爲大將双方砲發城下五六町燒る城方六人討死筑波勢十人討死敗走す

市川三左衛門等武田伊賀ノ黨ト水戸ニ戰フ

同十四日天狗連筑波の屯勢不殘引拂ひ水戸を差て罷下り由依之八州廻り石井勘之丞人數五十人率連筑波町へ操込夫より宇都宮勢壬生勢歩兵隊追々操込由○大炊頭勢の栗崎より岩井町醫明院へ可引移と相越ひ處弘道館書生の固め居及戰爭此時書生方川上其外七人討死大炊頭方三十人討死醫明院へ被燒拂書生方敗北大炊頭此場を引擧松平大學頭松川陣屋へ入と云○武田伊賀先達てより完倉村濱野茂右衛門へ強談申懸大金を掠取其上同人宅へ致旅宿居し右等の戰爭を及聞親子孫三人完倉より磯の濱へ來る同十五日大炊頭勢並武田伊賀四郡奉行荒井源八郎外三人町奉行田丸稻右衛門藤田小四郎小川館水門館潮來館三館三首領林五郎三郎林忠左衛門家老大久保勘五右衛門柳原某岡田信濃守其外惣勢二千餘人中川の水南岩井町並臺場等へ出港す水北港町へ城方並北郷の民兵共凡千人餘川を差挾んで互ひ砲發す猶又翌十六日早朝より於同所互ひ砲發既し港町へ火移り燃上る折しも水南の賊軍川を渡り港御殿並水門館を燒拂ふ城方大に敗北して城中へ引取夫より賊軍城下五町天場へ押寄滯陣して應接有之其後廿六日廿七八日



と三日の間晝夜を分たぎ必死の戦争此時已に城方危うりと處奥州二本松丹羽左京大夫の援兵来りぬ故勝利を得て竟に賊軍敗北と湊磯の兩所へ引揚げ湊御殿焼跡へ小屋補理屯致ゆ由○大平山筑波山等の天狗組玉造潮來鹿島邊へ致散亂尙又金策を立何村誰兵衛何程何所の誰右衛門の何程と云事の惡者どもを犬よ使ひぬ故終に其家業身分は應じて大成の千兩以上小成の二兩三兩と云迄家毎は被致掠奪依之農商共大に困窮すと云○九月二日城方より三方討手其一番手は市川三左衛門鈴木石見守手勢七百人民兵千余人にて湊磯の兩所賊軍屯所へ押寄る其二番手の郷士白井友右衛門を大將とし民兵七百人モミシ邊へ押向ふ其三番手は先達て水戸城中より公邊へ願ひ依て後詰の援兵松平周防守勢と民兵共千余人玉造へ馳向ふて及戦争處玉造の賊徒致敗走鉾田邊へ散亂夫より鹿島根本寺等へ落行

官軍賊徒ヲ鹿島ニ追フ賊徒火ヲ鹿島大船津ニ放テ四方ニ散ス

同五日鉾田より川根通り本多修理勢中通りの松平周防守勢海岸通りは民兵都合三方三手は相成鹿島へ押寄大塚山鶴來より本多勢大船津村屯所へ大砲打掛賊徒の内川侯某を討取根本寺大船津村兩所の賊徒押出し及戦争の處賊徒敗北大船津

村へ火を懸け海陸四方へ散亂す賊徒の首五十級大船津村往來田の端に梶木お行ふ其餘散亂す依之近郷山々馳立日々五人六人宛召捕と云

佐倉勢遙カニ大砲ヲ以テ潮來村ノ人家ヲ焼キ直チニ去テ佐原村ニ宿ス

賊徒共大船津村放火致し逃去ひし付佐倉勢推察に賊徒共毎度潮來の遊女町へ致し宿の間定て此度も止宿隠れ居る者成んと討入度へ思ひしなれ共賊の強弱見切れされぬ近寄事を恐れ遠方より大銃と打込み遊女町を焼拂ふ既ぬ此時に賊徒一人も居合さぬ唯町家を焼拂ふ事實ぬ可憐事也痛敷事云計りなし右佐倉勢は近寄事を怪しむ遠方より大銃を以て町家を焼拂し賊の居ると居ざるぬ構なく其儘佐原宿へ屯すと云○麻生勢は潮來村賊徒の新砦を焼拂ひ大宮臺にて及戦争賊徒を追拂ひ麻生の城へ引返すと云

追討諸侯十四家ノ勢ヲ以テ數所ノ賊營ヲ圍ム

松平周防守本多修理勢は鹿島行方兩郡の賊徒を逐拂ひ夏見村へ参り磯村と大貫村の間堀川と云を堺として九月廿一日及戦争賊徒の内三箇の大將林五郎三郎外五六人討捕し其夜大貫村明光院に陣取居る所へ夜討を掛られ松平周防守勢物



頭始め士分共廿一人討死有之同廿八日松平周防守勢本多修理勢公邊の討手歩兵隊並水府勢天野伊豆伊達幸藏磯村へ押寄賊軍屯所の町家を焼拂ふ依之賊軍共岩井町へ川を越て湊町へ敗走す此時追討の諸侯追々相増し總督田沼玄蕃頭其外水府勢棚倉勢本多修理勢高崎二本松佐倉宇都宮新發田館林川越安中岡部の諸勢其外旗本並歩兵隊惣人數何十万と云數を不知右惣人數を以て湊町飯山岸山判砂樓等の賊徒屯集所を八方より相圍む海邊より公邊の討手蒸氣船を以て砲發す此時賊將福地政之助一貫目の寶丸を以て蒸氣の船腹を打抜く是ふ恐怖して蒸氣船逃去

官軍星野正之助賊竹内百太郎ト闘フ  
此頃水府の郷土安食村仙右衛門悴浪人大將竹内百太郎戰ひ破れて馬上にて逃出けるが敵の目よ付んを厭ふて馬を棄捨て逃延る所へ歩兵差圖役星野正之助と云者逐蹏來り近づき接戰竟し組討と相成暫く組合居し星野正之助組敷れ既ふ危き所へ歩兵馳付百太郎を後より突留る依之星野起上り百太郎が首を得ると此説信ト難し然れ共星野正之助の御目見以下成し此功ふ依て小十人格被仰付銀七十枚拜領歩兵差圖役本役と成る

松平大炊頭松平周防守ノ陣營ニ降參ス

此頃松平大炊頭先非後悔して松平周防守へ申込降參す依之大炊頭主從四十三人周防守勢にて警固し江戸へ送んとて西宮寺村迄送り参りしが水戸書生大勢來りて水府城中へ引戻し大炊頭切腹し家來四十三人打首ふすると云

水藩山野邊主水正劫サレテ賊軍ニ入ル

此頃眞芳院殿命ふ依て山野邊主水正水府城入可致とて從者より大砲等引らせ助川の居城より途中へ押出ひ所其時大平組の賊徒水府郷土スカタ村寺角辰一郎と及戰爭賊徒打負逃來る所へ山野邊主水正出會す賊より敵歟味方歟と尋し故に恐怖の餘り味方と答ひ故賊徒等山野邊の引來る大砲人數を以て跡より追來りし寺角勢を打拂ふ依之寺角勢へ引返し山野邊へ無據賊徒を率る歸城せしが後悔し賊徒を斷れ共中々聞入無ふ恐をなし城中より遁出し近在の醫家へ隠れ夫より二本松侯の陣所へ降參申入ひ其後右寺角辰一郎へ先達て山野邊ふ大砲を以て討れしを遺恨ふ思ひ山野邊の居城へ夜討を掛て焼拂ひ四十八人討捕

判砂樓賓賓閣兩所屯集ノ賊徒官軍ニ降ル

賊軍屯所の十二諸侯其外惣討手勢にて八方より相圍の爲に双方砲發致し十月十





日賊の屯所岸山を市川三左衛門乗取り田沼玄蕃頭より市川三左衛門へ下知を傳へ其所へ建札す其文あり曰

今這賊徒屯集の内には素より精義の者も有之所無據賊徒へ被引入る者も有之哉お相聞ひお付不殘討戮し致しひも歎ケ敷事故先非を悔み改心の者於有之の寛宥の係處置可有之事 御目代田沼玄蕃頭 市川三左衛門へ

と認め有之其後廿二日判砂樓湊御殿屯集の賊徒武田伊賀の爲に滅亡するを口惜とて堀田鴻之丞陣所へ降參申入る依之官軍より下知の趣き降參の者も皆茜木綿の褌を懸け此方より打懸し大砲を合圖お屯所へ火を懸べしと相達す依之同夜約束の通り火を懸二ヶ所の賊徒千二百余人降參す右降參人の内四百人堀田鴻之丞三百余人久世大和守三百余人松平右京亮へ係預ケ妻子共へ水戸下町へ揚屋入お相成る

賊武田伊賀等五百餘人館山ノ營ヲ退ク

館山お楯籠る賊將武田伊賀の右二ヶ所の賊徒降參を聞て是にては凌ぎ難しと思ひし哉十月廿三日賊將武田伊賀を始として凡五百余人白晝お悠々と館山を引拂ふ此時流石武田伊賀が指揮故隊伍行届き無透間や又何故よひ哉官軍の手を束ね

て見物致すのみ誰一人手を出す者無りしと云ふ賊徒夫よりダイゴ村島山宇都宮を越し十一月九日野州葛生町大平山北西なり通行

賊徒旅宿ニ就キ野州葛生町役人ヨリ届書

乍恐以書付係訴奉申上ひ係領分野州葛生町組頭兵助名主吉澤藤七頼お付同人親藤右衛門奉申上ひ當月八日夕七半時頃隣村小曾戸村役人罷越申聞ひにへ水戸殿浪士尻内村へ七十人程大橋村係本陣お八百人余止宿其外金崎宿栗野村深程村等お致止宿ひ分共都合千人余り同村より繼立明日當所へ操込參りひ趣申越ひお付役人共一同驚入ひ得共何れ人馬差出し繼立ひ積りよ係座ひ間當町にては隣村を相頼み人足四百人馬八十疋相雇ひ夫々用意致し罷在ひ翌九日朝四半時頃一隊お旗指物眞先お押立行列正敷馬上或は歩行立にて陣羽織衷甲小袴等着用にて鉄砲又は手鎗等携へ居尤も鎗の何れも鞘無之穂先を紙お包置大砲は一挺宛車お乗せ都合八九挺曳せ惣人数八百七十五人乗馬並小荷駄共都合馬百五十疋右人数の内怪我人と相見えひ者三十人程馬並駕籠お乗其外小袴着用帶刀致し面体は頭巾を以て押包みひ女五六人程是以て馬お乗り駕籠お乗り追々到着ひお付直様隣村田沼村へ繼立可仕心得の處當所止宿と相定り無據町内旅籠屋共四軒其外善藏寺善



勝院町役人宅又ハ手廣なる家ハ宿仕ハ其掛札ハ天勇隊地勇隊龍勇隊正武隊武  
田伊賀田丸稻右衛門山國喜八郎藤田小四郎栗田源左衛門須藤敬之進人見忠藏武  
田魁助關彦四郎淺倉猪太郎大畑外記右之通り泊り場所へ名前札差出シ其外重立  
ハ者多人數有之ハ様子ハ座ハへとも此儀ハ相分り不申都合凡千人前後の止宿  
相成翌十日朝五半時より晝頃迄ハ不殘出立尤も木錢米代相拂ハ田沼村迄平穩  
繼立相濟ハへ共残り人數明十一日操込來リハ趣ハ座ハ處同日ハ兩三人程も罷  
越少々亂妨相働サハ次第有之ハ得共成丈程よく取計ハ穩便ハ繼立仕ハ依テハ前  
書ノ次第にて猶此上多人數罷越何様ノ變事可仕出も難計小前末々迄氣遣敷少  
も安心不仕ハ間ハ出役奉願上ハ何卒以御慈悲前段被爲聞召譯急速ハ出役町内  
取締被成下置ハ様奉願上ハ以上

元治元年甲子年十一月

右役人 惣代 吉澤藤右衛門

御領主様御役人中様

上州藤岡町ニテ賊徒ノ行装ヲ見ル某氏ノ書簡拔抄

賊徒夫より追々打越上州藤岡町中仙道倉ヶ野 宿凡南なり行装書留十一月十四日午ノ刻藤岡  
町へ到着先手の軍將白井織部と申者也其形容下着ハ白綿子小袖二ツ上着ハ黒の

御紋附黄麻の割羽織着用此者人馬繼立等万事を差圖す騎馬にて隨兵凡五十人余  
一番手の備龍の字の幡一流並よ登當答と云文字鑄附ある大砲二挺持筒并挺鎗弓  
等銘々相携へ此手の大將甲冑騎馬にて腰の銃ハ采配を納め黃羅紗の陣羽織着用  
馬印ハ金の瓢箪程々緋一段刷連なり此隨兵凡百余人二番手備魁の字の幡一流大  
砲二挺前同様の形勢馬印ハ金の三蓋笠程々緋一段刷連此隨兵凡百余人三番手備  
赤心の字の幡一流大砲二挺前同斷の形勢此手の大將藤田小四郎と申者紺糸威の  
鎧金の鍬形六十四間の筋兜を脊負黒天鷲絨三ツ星ハ一文字の縫紋の陣羽織着用  
腰ハ采配を納め威勢凜々として乗込來る但し馬印ハ金の雨笠程々緋の短冊十八  
枚附たるを押たて三ツ星ハ一文字の吹流シ幡一流幡の頭ハ金の玉をつけ有之誠  
ハ美々敷出立にて諸人目を驚くす此勢凡百五十人余四番手備報國の字の幡一流  
大砲二挺大將前同斷の出立にて金小札卯の花威の鎧海老色羅紗の陣羽織を着用  
筋の兜ハ家來ハ持たせ重藤の弓を提へ箭ハ森の如く脊負采配を腰ハ納め馬印ハ  
猩々緋の三本芭蕉ハ猩々緋一段刷連此勢凡百余人五番手備攘夷の字の幡一流大  
砲二挺前同様ハ操出シ大將武田伊賀守悻小四郎紺糸威の腹巻ハ猩々緋の陣羽織  
着用白熊の毛の采配を腰ハ納め馬印ハ三ツ巴の太鼓程々緋一段刷連此勢凡百余



人六番手備攘夷の字の幡一流大砲三挺前同斷操出し大將武田伊賀守下着の白綸子の小袖二ツ上には黒羽二重糸紋附紫羅紗の陣羽織着用腰の采配を納め紺純子の小袴下に裏甲着用致し金覆輪の鞍を置二重革の泥障金象眼の鎧誠は華美成出立なり乗馬の次になめし革青漆の金の紋附たる具足櫃を脊負せ是を附屬の者お聞けは武田家の什器にして七曜の星の軍配は法性の兜金の武田菱の紋附たる緋威の鎧と云先祖甲斐の信玄戰場往來の節所用致せし天下の名器の由馬印は猩々緋の三本芭蕉緑りの青竹羅紗金の武田菱猩々緋二段刷連なり引續きて田丸稻右衛門の少々致怪我の由にて駕籠は乗り刀の鞘は熊皮のなげ鞘鎧は駕籠の外へ相見え申は此者の前中納言源烈公の係位牌を脊負ひ故止宿所小休共此者の居る所と本陣と相唱へ前後左右嚴重相固め申されは馬印の金の金玉三尺丸なり猩々緋二段刷連三ツ鱗の大幡一流押立大將と相見え如何にも威風凜々として見る人恐怖致しける此勢凡二百六十余人七番手備天の字の幡一流前同様の備へ後殿として大將の國分新太郎と申者糸紋附小袖黒天鷲絨九曜の星の組紋の陣羽織を着用栗毛の馬は朱塗の鞍を置網代の具足櫃を脊負せ九曜の星の紋附たる大吹流は一流馬印の金の流幣猩々緋一段刷連此勢凡百五十余人右何れも隊伍を整

へ暫時休足中使番と稱するの騎馬にて市中端々迄見廻り彌人足割込整ひ得は初めの拍子木にて身繕ひ致し二度目の拍子木にて操出し惣勢凡千余人と相見えたり其内騎馬武者二百余騎大砲都合十五挺小筒は切火繩鎗は残らざ鞘をはづし金子を附たる馬十疋兵糧米を附たる小荷駄馬凡二百疋其外武器兵具等數多繼立申は金子を附たる馬と小荷駄二百疋は浪士の手馬と云先手の軍將等が町方へ参りて納涼臺を出せと下知致せし故所持の者は銘々床臺を取り出し置は處腰掛申さむ同勢の内へ這入て休足故出立迹にて一同不審お思ひ衆評お及ぶ所是は全く不意お討手の向ふ節お此臺を楯お取り相防ぐ爲の由成べし寸暇も油斷なき事お座は

高崎勢賊徒ト上州下仁田町ニ戦フ

斯て賊徒共は藤岡宿出立其夜吉井宿泊り翌十五日同所出立福島富岡より高瀬廻り一ノ宮通り南蛇井より小坂峠を通り下仁田町泊りお相成然る處高崎勢一番手中仙道新町宿より操出し二番手岩鼻迄右惣勢十五日倉賀野宿より山名馬場へ操出し吉井より一ノ宮南蛇井より梅澤峠へ掛り賊徒より先廻り致し十分勝利の積り小坂村岩下の名宅を本陣と致し十六日未明より右岩下下仁田通りにて戦ふ



高崎勢一番手二番手相備ふ場所右の方山手にて左の方河原有之道幅僅二間位長八町程の所にて高崎勢凡四百人計り賊徒方四十人宛二手相備大小砲打合相成ひ處賊徒計策を以て致伏勢置大小砲打懸炮烟の下より高崎勢備の左右より挟み討直み突入切崩し大合戦相成ひ處高崎勢不意を討れひ事故忽み被切崩討死六十人程生捕れ十一人出来散々み敗北致し賊徒大勝利を得同日巳の刻頃合戦相止み討捕ひ首並刀鎗等原の井戸より水汲上げ首級を洗ひ本陣櫻井彌兵衛方庭へ蕙を敷き首實檢致し分捕の品々大砲五挺小砲鎗長刀其外玉藥一二駄程も有之下仁田町宿料相拂ひ同日午の刻出立宿々繼立途中小坂村の内ヲと云所の橋を切落し置小幡勢双方の山より賊徒の方へ鐵砲打懸ひ得共賊徒方怪我致す者なく只人足二人致怪我ひ趣其邊の農家五六軒放火し信州路へ立越ひ右様不容易大變よ付下仁田町邊家財取片付土藏目塗致し老人女子供等立退せし

官軍徐ニ賊徒ヲ追フ

先達て賊徒共水戸館山を立拂の跡より追討の諸侯惣督田沼玄蕃頭並新發田勢忍勢笹林勢川越勢安中勢岡部勢其外御旗下騎兵步兵隊共數を知らせと云

此節道路の言ひ此度の追討惣督田沼氏何の深謀ある哉又臆せしにや足早の歩

見使の者を出し置き賊徒何宿幾日何時彌立拂相成ひ趣注進能々承り其上にて出立賊徒滞留とあれば又滞留し兎角賊徒へ押付不申様廿四五里ツ、も跡より後れ賊徒通行の跡をくくと相尋ね登りひ由

賊魁ノ首級ヲ上ル者ハ賞典ヲ賜フノ旨ヲ上州邊宿村ノ高札場ニ揭示ス

賊徒武田伊賀田丸稻右衛門を討取り首級を持參致ひ者ハ譬へ同類たり共其罪を免し後褒美可被下ひ間無二念忠志を可抽もの也子十一月官軍隊長と認めありひ由なり

賊徒信州路ニ赴クニ就キ違書

野州邊屯集の賊徒共の内脱走の者有之信州路へ罷越ひ趣よ付追討の義最寄の面へ相達置ひ得共間道等通行京坂長州路へ罷越ひ哉も難計ひよ付銘々領分ハ勿論他領迄も申合嚴重取締向相心得若し怪敷者有之ひハ速み召捕手向ひ等致ひハ打捨ひ様可被致ひ

右之通信州路より長州路迄領分有之面々へ早々可被達ひ

賊徒信州路ニ到ルニ就キ諸藩出陣ノ景况某氏書翰ノ抜抄



上田藩より書狀の寫 追々賊徒共高崎勢戰爭勝利を得追分宿の方へ差向ひ様取沙汰にて小諸人數の影も固め差出と追分近邊へ相備へ一番手操出ひ趣飛脚にて注進有之の間其以前調役山崎良助小諸迄間合せ罷越此方にて一番手二番手共十七日晝頃より追々支度一番手へ同夕七ツ時操出と二番手へ同様五ツ時操出ひ其以前使番山田貫兵衛罷越直み跡より奏者番土屋右衛門物見並に使番相勤ひ一番手を領分境加澤へ二番手へ田中宿へ右人數白麻の鉢巻陣羽織小袴其外一統小具足着用大砲車臺四挺戰士鎗弓鉄砲等持參且人數の外領分中獵師共百五十人搥尻組農兵の者共百十五人獵師並農兵の者共十八日より追々操出と申ひ百十五人農兵の者共何れも村役人割番其外庄屋或は身元相應の者にて兼て非番の節城内外へ固め可致者にて戰場へは罷出ひ者共故一統帶刀にて鉄砲持參丸堀足輕稽古場へ爲相詰預り浪人圍の内へ二十人宛差出と番士の外も相固めさせ申ひ○十九日浮浪共追分の方へ參らぎ上州筋より本宿泊りにて夫より追々中仙道へ相懸りの趣注進有之右より付十八日夜人數一番二番共武石村へ操込相成ひ處何を申も一統十六日より四日の間夜分も休息無之故一同致疲勞ひ○浮浪共小諸領望月宿泊り蘆田宿晝休にて和田宿泊り注進有之惣人數武石村へ操込に不相

成ひへ共雨天にて里數も四五里有之儀故多數の操出と何分果敢々敷參り兼乍残念遲滯賊徒共和田宿泊り相成ひ其以前長窪にて一戦と見込み處遅刻にて間み合不申ひ○兼て從公邊も他領と申合取締向嚴重被仰出も有之得共中合何分急場と相成ひ所松代小諸兩侯へ使番を以て申談有之得共行届き不申是と申すも太平打續き情弱お打過ひ人氣柄故と歎ケ敷事な座ひ其次第の小諸にて挨拶に上田侯家様の所方にて御差圖無之て小家の儀故人數其外万端行届不申ひ趣に兼て被申聞有之の程にて實も小人數にて武器其外玉藥器械不行届の様子段々始末柄相探り見ひ處内實も小家小人數故打洩し趣申立お致し積りにて無難と進れ申度所存の由其證據も小諸領望月旅宿致させ蘆田宿にて晝辨當めて賊徒通行致ひ得共此方へ内通も無之右兩宿通行の砌も人數等一切不差出無滯通行爲致ひ始末の公邊へ對し不相濟儀と残念お存ひ○松代表十八日より物頭日井平左衛門池田良八郎兩人にて人數足輕六十人召連れ大屋村迄出陣と跡二番手の鼠宿へ六百人扣居り其外陣代家老も罷在ひ趣右六十人の一番手と被申ひ得共足輕計りも座由○彌和田長窪の方切所おひ間只今大屋村へ出張の人数當人數と係一同武石村迄御出陣被下度との使を遣し處右白井池田兩人の申聞ひ挨拶



搦に何れも速答の難出來の間鼠宿出陣の方へも申談の上は挨拶可申趣にて  
手間取の間此方人数の不構武石村へ遂に操出しに相成其後松代より挨拶に當  
方の大屋村の口御手薄と見請の間川手前も罷在相防ぎ居の間武石村への出陣致  
の儀迷惑の趣申來り尤も其以前外用向にて此方より山崎良助鼠宿松代勢出張先  
へ相尋の處二番手の模様も更も無之人馬操出し出役として代官一人手代四人出  
張切りにて外も人数等一切無之二番手人数六百人鼠宿も相扣の儀も無之  
の右様小諸と申し松代と申し不束の次第柄にて何分三家共一攻も人数を操出し  
戦争杯の由も談し整ひ難く彼是手後れも相成騒ぎ計りにて要々の敵を討洩し  
松本諏訪兩家の勢にて和田峠において戦争も相成り申す

松本諏訪ノ兩藩賊徒ト和田峠ニ戦争ノ景況和田宿役人ヨリ届書

乍恐以書付奉申上り浪士昨廿日和田峠東餅屋下より豊橋茶屋の上迄道路材木横  
倒し有之を切抜け並大石落し有之をも取除け橋々の外に有之をも拵へ通  
行致し節東餅屋上にて大銃三發打掛し付防隊近き有んと浪士共取急ぎ峠  
に至り見渡し得共防隊の陣所不相見西餅屋四軒並同所下字タルキ岩棧道を打  
破り焼拂有之其下の方見渡し處豊橋上の方諏訪松本の兩陣相並ひ銃隊の備

も堅固も相見え夫より七八町引移り字榎木場天狗岩の麓も浪士共陣取り則絶  
壁の岩上より大銃打懸初め晝八半時迄對戦一時計りも過ひと南の方谷間より  
賊騎兵隊五十兵程操上げ山頭の賊も又同時攻下し前後より挟み討の間忽防隊  
兩陣敗走七半時過陣拂ひ浪士の豊橋の防隊陣場の跡見廻り相攻めを見聞あ及  
び所防隊兩陣の討死大將分四人其外數不知手負人は又數不知浪士方討死二人  
内一人は武田の家來横田某と申者外も手負三人分捕の品大銃五挺小銃玉藥鎗弓  
矢陣幕挑灯松明小荷駄陣太鼓生捕三人内一人は甲冑の儘右の内馬と玉藥も浪士  
持行挑灯松明の相用る其外の品も焼捨申す○豊橋防隊兩陣引拂の節茶屋二軒へ  
火を懸ひを浪士馳付五六人家根へ上り消留申す彼是時刻押移り夜四ツ時頃下諏  
訪宿へ浪士入込來り處宿内一同驚怖し逃去し故右明家へ操込止宿致し今廿一  
日明六時より追々立拂ひ伊奈街道へ立越申す由○右の見歩使の者見聞も及び  
丈も座の出張の同役共只今歸宿仕す付此段申す以上

元治元子年十一月廿一日夕上田様後郡方奉行所様中仙道和田宿年寄府右衛門  
右和田峠戦争の模様も前書の趣相違無座由松本勢一番手討れ諏訪勢裏切の  
様子見受ひて早々散亂逃去り少々の内戦争故家老一人討死の由松本勢へ余程の



内せり合夫人足五十人程不知戰士の分三十人程即死又ハ手疵を負ひ由松本の家老稻村久左衛門行衛今以て相知不申由○松本二番手の桔梗ヶ原へ固め居り處木曾路への余程下諏訪より伊奈の方へ引拂ひ申ひ右ハ付跡々の平穩相成り間當方人数ハ武石村より一番二番手共惣人数廿三日引取相成り夕七ツ時過り追手口へ操込歸陣相成申ひ道筋物見の者夥敷事ハ座座ハ

賊徒中仙道福島ノ關ヲ越ユ  
從夫賊徒追々打越し十一月廿九日中仙道木曾路の内福島の關所へ賊徒相懸り口上の大意拙者共儀一橋卿へ兼て申合せし事も有之ひハ付今般上京致しハ右ハ付御關所罷通ると演説して悠々と相通りハ由右ハ付關守山村甚兵衛より斯々の次第にて支る事相叶はぎ無據御關所を相通しハ段京都へ注進致しハ由  
賊徒追討トシテ一橋刑部卿並ニ諸藩京師ヲ發ス

右之通り山村甚兵衛より京都へ届出ハ付賊徒追討として十二月朔日一橋卿並別手組諸藩道々京都出立大津宿へ出張致しハ處中仙道の方より追々注進の趣賊徒ども北國路へ相廻りハ趣ハ付一橋卿を初めとして諸藩一統西近江唐崎堅田通り北國路へ發向す依て討手勢ハ北行して越前國福井街道ハンハラ宿ハ討手先

陣の隊長として加州勢固め二陣ハ湯川宿大坂勢固め三陣ハ正田驛口の兩宿を會津勢固め海津宿ハ一橋卿本陣として固め左翼の先陣敦賀港ハ加州勢筑州勢若州勢桑名勢一橋勢別手組等固之長濱街道近藤板鳥の兩宿ハ右翼の先鋒として彦根勢固之二陣中河内宿ハ同藩木俣清左衛門固之内三陣梁ヶ宿ハ大砲組固之  
追討諸藩賊徒ト對陣原本圖欠ク

越前國福井街道新保宿ニ於テ賊徒加州藩ノ陣營ニ降ル  
賊徒どもハ先達て福島關所を越へ中津川宿まで押通り夫より道を替て越前國敦賀港をさして北行す既ハ十二月九日福井街道今庄宿へ着翌十日滯留致し前後左右の模様を見渡しハ所福井街道ハンハラ宿ハ討手の先陣として加州勢其餘二陣三陣の固め有之長濱街道ハ討手右翼の先鋒として近藤板鳥兩宿へ彦根勢其餘二陣三陣の固め有之賊徒の後ハ湯尾鱗波の兩宿ハ越前福井の軍勢追詰たり如何にも切迫致し翌十一日朝今庄宿出立二ツ谷宿と打越し先陣ハキノメ峠を越へ新保宿へ操込たり後陣キノメ峠へ差懸りハ處後より越前福井勢追詰來り互ハ砲發有之ハハども雪七八尺も積り有り双方とも進退自由の働さ成を依之打止め二ツ谷宿ハ越前の春岳公本陣として今庄宿迄固めたり依之前後左右諸侯の討



手何十万と云敷を知らず退けハ福井彦根の兩勢扣たり進めハ加州の先陣あり茲を以て切迫進退究り新保宿よりキノメ峠兩所の内ハ十一日より廿三日まで屯集扣居シテ山谷の間殊ニ雪中兵糧秣等ハ差支へ疊を切て秣とし後ハ彌兵糧盡き馬を殺し食したりと云ふ是を以て飢たるを討ハ武門の習ハ非とて生氣回復の上一戦を遂べしと先隊の加州陣所より兵糧を贈り由依之加州家の恩義ハ伏し賊魁武田伊賀を始めとして七百七十六人加州陣所へ降伏申入る

降參賊徒姓名

武田 伊賀	同彦右衛門	同	魁助	山國兵部
同 淳一郎	竹中万次郎	三橋	金助	田丸左京
小野 斌男	山形半六	瀧川平太郎	竹内百太郎	
朝倉 彈正	川瀬專藏	長谷川道之助	井田因幡	
伊藤 健藏	須藤桂之進	小野藤五郎	岸信藏	
瀧口六三郎	濱野松次郎	八木城之進	市毛孝之助	
芹澤助次郎	村島万次郎	秋山又三郎	樫村平太郎	
桑屋元三郎	中村親之助	檜山三之助	岩間久次郎	

國分新太郎	濱野辰次郎	松山彌一郎	津田新之助
佐々木重藏	前木光之助	朝倉三四郎	小野馨之允
高橋市兵衛	下野廉三郎	安藤繁輔	横田彌四郎
小泉虎次郎	小泉芳三郎	都賀厚之助	萩谷金次郎
關内熊五郎	川部信藏	高瀬季之助	安藤彦之進
多村右三郎	渡邊雄之助	木村雉六	玉造清之助
神山勇	石井政之允	加藤鉦之助	篠井三郎
大和田外記	小栗彌市	川上清太郎	北村惠雄
京藤之助	加藤惣助	奇金貞次郎	野口主馬
森誠之助	川崎鎌之助	莊司與十郎	伊藤榮太郎
鈴木季太郎	唐津俊藏	平野重三郎	難波源之進
島田文右衛門	深谷四郎	高野長五郎	中島眞助
大内雄之助	高橋元次郎	櫻井辰之助	大竹松五郎
沼田克藏	篠原造酒造	高橋與四郎	内藤昇一郎
小坪莊左衛門	照沼柔次郎	房前善藏	松崎熊之助



田中重藏	山口四郎右衛門	長谷川熊吉	山口幸助
關友吉	田口彦七	見川新八	大久保新三郎
星野龜太郎	岩戸常藏	川崎藤助	笹見幸三郎
栗飯原三藏	西東多助	栗山清作	谷村與右衛門
川澄清右衛門	上野六右衛門	幡谷善七	小松野庄之助
笹見福次郎	登戸佐兵衛	田中三之助	竹井惣吉
堤三次郎	山田國次郎	石部	中沼平助
坂本源助	石崎彦作	小島重次郎	板橋勝次
川澄鬼平	田部重平	田村長左衛門	菊地忠兵衛
本多作三郎	渡邊久助	今野勇	平山藤兵衛
加藤積次郎	上嶋善七	藤田平次郎	大出大助
高橋一米	北村勇次郎	松本富藏	溝口太兵衛
野口重吉	石川甚五郎	立花文次郎	黒澤理八郎
中村清之丞	三木源助	木山藤五郎	瀧口清之進
塚田與吉	官本嘉傳次	高田金次郎	井坂貞藏

柏貞三郎	武田春吉	本田巳之太郎	横田藤十郎
野村徳兵衛	三田徳兵衛	蓮沼利助	中山兼五郎
佐々木久助	服部由兵衛	田崎桂藏	清水八次郎
青柳留吉	嶋志田伴七	熊澤喜三郎	宇佐美孫兵衛
小林貞七	石川鉄藏	關登一郎	成井藤九郎
赤飯織之助	吉川伊之助	小松主殿	小泉平三郎
鶴田善兵衛	小俣隼之助	高橋勝三郎	山中嘉七
米川忠七	長尾定吉	大津雄太郎	増田喜平次
富永鉄藏	武藤龜吉	森庄三郎	小川忠吉
堤善兵衛	有田八郎	眞木孝之助	平山良之助
武石良之助	小俣啓次郎	加藤太郎	岡野彦四郎
樫村定五郎	安清四郎	樫村忠兵衛	高崎四郎
酒井八三郎	桐伊助	山口庄助	岡瀬録治
平野岩吉	鈴木庄次郎	片岡源次郎	木村水之助
石川忠右衛門	小村田彌平次	中川新助	小松彌太郎



坏藏之助	鶴田由右衛門	山田瀧之進	清出源藏
月岡久治	鈴木清吉	福谷久助	木村彦四郎
矢口金右衛門	小松崎德次郎	關源兵衛	岩松相之助
輪井利兵衛	中村藤一郎	小野平德二郎	長谷川定吉
塚原萬次郎	關口善吉	鈴木信藏	吉本次郎吉
加園新太郎	藤田啓助	大和田繁吉	武田孝藏
藺部千介	小川新十郎	西名惣七	山本佐一郎
大和田秀次郎	長谷川郁之助	飯村新之助	小笠原信之助
小泉又介	坂本小一郎	青木大五郎	二川芳之助
鶴田與八郎	大分大助	金澤勇助	井坂彌兵衛
長谷川半藏	寛忠三郎	白田藤吉	堀兵助
鬼津茂平	前野彦藏	關口伴助	野口松次郎
近藤半藏	關口定吉	乾源藏	島山七藏
荒井主計	岡田主水	齋藤安之允	關彦次郎
鈴木源吾	小沼新三郎	市毛源七	笹目彦八

中村惣兵衛	齋藤久右衛門	中山重藏	藤田中務
小川三郎	飯泉芳之助	楠要人	山田一郎
淺川誠一郎	芝田清兵衛	關口直十郎	福沼平太
潮田啓三郎	山口儀八郎	菅谷安兵衛	奥村清吉
鹿島茂兵衛	坪山源助	前島竹次郎	金輪清之助
香田彦三郎	藤岡利兵衛	米川小次郎	宮内仁助
石神三次郎	山本三五郎	官崎安五郎	石田秀之丞
田村定之助	石島彦七	加藤庄吉	鬼津熊次郎
鴨田勇次	高橋喜助	伊藤源太郎	佐野貞一郎
荒木政吉	藤岡大介	堀江藤之助	畠山政之進
高崎新平	前島源三郎	吉川文藏	篠原伊介
高田助右衛門	富川寅次郎	今泉丹次	佐々木庄造
杉藤七	塚原時次郎	林義之助	倉上五郎
石井藏之助	門崎善兵衛	飯田貞次郎	飯田與三郎
細谷彌七郎	大久保重太郎	中根新作	新橋鑑太郎

嘉永元年閏金卷十三  
甲子  
二十二  
賊首刊載書



喜内 鑑作	内藤利兵衛	小林多助	神田左右助
池田孝太郎	山口新作	須木藤吉	中村源太郎
村田鎌之助	小島岸十	小貫藤助	久保田久吉
兼平與惣右衛門	茂木淺吉	箕輪啓助	小貫淺右衛門
出沼榮吉	小峯龜吉	小島彦次郎	出沼藤一郎
箕輪庄藏	栗又新兵衛	宮本彌次郎	石川春吉
大久保藤吉	森山藤右衛門	高木貞右衛門	秋野源兵衛
青木源助	本間新三郎	小杉平十郎	茂木直衛
高橋甚兵衛	片岡武右衛門	山中清吉	小島新作
金田銀藏	箕輪又四郎	高井伊兵衛	内野啓兵衛
佐藤與三郎	萩利兵衛	荒井辨次郎	明間半兵衛
片岡啓七	箕輪圓次郎	前島德之助	前島雄三郎
前島七藏	辻利吉	鷲川虎松	坂良吉
萩原造酒之助	飯村晋三郎	阿久津小太郎	余津啓助
柳下啓藏	藤田秀五郎	齋藤三代松	楠音次郎

加藤木雄助	二方舍人	吉野勇	大高要助
加藤榮次郎	木内定五郎	黒津健藏	同國三郎
片倉長吉	寺門周吉	小澤彌一郎	栗飯原庄二郎
堤清八	山形啓助	關隆吉	小沼榮助
關根啓一郎	大野勇之助	木村蘭三郎	萩野甚藏
大島新助	一九太介	刑部才二郎	刑部熊太郎
中庭力三	羽黒条之助	河島森二郎	八幡繁松
池田倉之助	萩原定之助	伊藤久藏	渡邊金次郎
飯島喜助	飯島與助	大子竹次郎	山田平次郎
山口熊次郎	中村又五郎	佐々木庄藏	安藤正之助
梅川武四郎	宮本孫四郎	青木源之允	梶山啓助
吉川忠藏	安我藤十	片波見藤二郎	飯田民藏
立原浦次郎	同丑松	宇津木七之助	川津丑之助
栗飯原久七	同留吉	宮本安太郎	山口庄助
森川長吉	櫻井惣之助	房前長次郎	堀井松次郎



長山 良平	淺山 一壽	寺門 善次郎	望月 茂太郎
舟木 吉之助	石川 治助	原 勇	多賀野 辰之助
内藤 半三郎	川島 安藏	平林 常藏	内田 藤吉
米川 文藏	井上 榮五郎	吉田 藤藏	青山 清三郎
小谷 庄三郎	大島 新藏	深谷 勇五郎	高橋 惣右衛門
實川 三平	山下 鶴吉	三田 芳藏	深見 鉄五郎
滑川 平介	小村 清藏	藤枝 吉兵衛	大關 彌平
鈴木 清藏	坂 東藏	笹目 武右衛門	細川 美代五郎
關根 角兵衛	齋藤 伊三郎	小峯 半十郎	住谷 彦太郎
中河 原與助	宮本 清藏	福島 爲之助	吉田 清助
石川 惣助	茂木 又助	木村 安五郎	關本 竹次郎
吉川 半兵衛	宮本 茂助	多田 孝藏	中島 芳右衛門
内堀 貞助	前野 半七	齋藤 吉次郎	山本 茂助
手葉 常次郎	岡野 彌兵衛	元木 安次郎	日向 四郎
市川 兼五郎	小澤 五郎	黒田 定吉	小林 清助

村田 清助	遠藤 元吉	青木 千次郎	大山 清太郎
大久保 半七	長谷川 健藏	服部 庄助	小林 一次
同 新作	倉澤 友五郎	田口 林右衛門	直木 東平
龜山 大助	高野 友右衛門	富士 半一郎	大久保 久兵衛
島田 勝之允	齋藤 万次郎	加藤 惣吉	鯉淵 惣助
白木 禮三	武口 道之助	白澤 伊平太	中村 圓之助
齋藤 清助	飯塚 次郎	藤田 藤藏	上田 仁助
前田 丑太郎	上板橋 徳次郎	小山 忠五郎	高木 佐兵衛
莊司 幸三郎	小林 久次郎	木村 龜次郎	小山田 勇之丞
石塚兵三郎 小山 忠三郎 右此兩人ハ十二月廿五日病死			
○武田伊賀家來			
小林 平之進	河井 房次郎	關 勇之助	關 清一郎
鈴木 福三郎	横山 角右衛門	谷中 勇太郎	塩村 定之助
鈴木 彦三郎	古口 丑太郎	安崎 六三郎	梅原 辨藏
多田 梅太郎	園田 七郎	木村 七郎	市毛 莊右衛門
	森 兵五郎	渡邊 監之進	



○武田彦右衛門家來 北川元三郎 安島鉄次郎 山崎庄八郎  
莊司寅吉 別當惣吉

○武田魁助家來 伊藤官十郎 園崎兼夫 峯川清之助  
行島大之進 源右衛門 岩田虎之助 野崎佐吉  
別當定吉

○田丸左京別當 竹松 新四郎 久八  
善七

○山國兵部家來 神山芳三郎 淺野善十 原辨之助

○小野城男家來 寺澤辰之助 舟橋甚之助 谷塩友吉  
綿野武四郎 高谷徳三郎 細谷源助 佐川助五郎  
石神元兵衛 篠田利助 石川伊三郎 別當政次郎  
立花新吉 鈴木大八

○竹中萬次郎家來 飯沼善兵衛 野口清吉 伊熊彦三郎  
藤川榮藏 山崎貞助 薄井三藏

○山形半六家來 川澄鶴次郎 張替長兵衛 森虎松  
佐來登之助 井口藤四郎 別當吉兵衛 中間淺吉  
○井田因幡家來 栗又織之助 柳下鉄太郎 後藤子之助  
理助 兼吉 清助 善助  
民藏 惣吉

○朝倉彈正家來 小口元助 根本熊五郎 豐吉  
佐助

○瀧川平次郎家來 福田榮之助 片岡藤助 吉田雄助  
大越小市 小野崎千代松 別當金藏 中間周助  
○峯信藏家來 有田小一郎 千葉兼次郎 山本儀八  
和貝佐十郎 黑澤徳次郎 黑崎卯之助 別當吉右衛門  
○伊藤鍵藏家來 富永爲五郎 和田忠五郎 三田織藏  
別當喜助

○長谷川道之助家來 山平助 政助  
○市毛孝之助家來 岡山大藏 松本彦兵衛 別當又三郎







○森誠之助家來	信尾定十郎	宇野兼吉	彌兵衛
○莊司與十郎家來	山田忠兵衛		
○鈴木秀太郎家來	山田藤次郎	高橋次	
○唐津俊藏家來	松五郎	彌市	
○平野重三郎家來	清吉	源八	喜藏
○篠井三郎家來	佐々木太助	橋本益吉	今井平助
○本多兵太郎			
○宇野長五郎家來	皆川龜松	星崎小三郎	荻澤定三吉
○別當松五郎			
○中島貞助家來	上田藤次郎	石田岩吉	
○大内雄之助家來	打孫兵衛	鴨志田喜平	豐田儀左衛門
○別當儀右衛門			
○高橋元次郎家來	横山孝太郎	甚兵衛	
○篠原造酒藏家來			
○高橋與四郎家來	三村久五郎		

○内藤昇一郎家來	五上民之助	安藤丈助	
○照沼柔次郎家來	大之進		
○松崎熊之助家來	飯田瀧次	渡邊金次郎	島田國太郎
○小林信之助	別當周治		
○谷村與右衛門家來	早川政吉		
○黑澤理八郎家來	塚田松太郎	黑澤八十郎	
○大和田秀次郎家來	原間九郎	小林虎吉	
○前崎德之助家來	常兵衛	傳七	留吉
○伊藤榮太郎家來	平助	助右衛門	
○高木德右衛門家來	信十郎	幾十	
○岡田七郎家來	龜山藤吉		
○渡邊臨之進家來	龜吉		
○多賀野辰市家來	櫻井久三郎		
○惣人數七百七十六人外	乘馬二十疋	小荷駄馬三十疋	



武田伊賀加州陣營ニ建言ノ書  
 戊午以來天朝醜夷掃攘の勅諭御下被遊より贈大納言殿日夜憂慮罷在防禦の計策數度建白被致ひへ共遂に行届不申臣子の至情遺憾無此上當中納言殿も去亥年上京の砌り公邊補佐攘夷の成功を奏し様との蒙 勅命 天盃眞の御太刀迄拜受被爲在歸府被致ひへ共何等の効驗も無之ひお付有志の者一同熱心勞思是非共醜夷の凌辱を雪ぎ 御國体相立ひ様との存込決死盡力義氣を鼓舞罷在ひ處當五月中從 天朝被仰出ひ鎮港の儀從公邊御布告相成しを奸臣市川三左衛門等江戸表へ登り邪説を主張し百方相妨ひお付有志の者一同申合せ領内港前へ引取ひ處右奸徒等士卒を差向致砲發ひお付無據及接戦ひ然る處公邊の係人數迄願下しの儀後お承り諸侯の兵をも動しひ段深く恐縮仕ひ好亂弄兵の存意無之ひ勿論おひ得共有志の者一同因循罷在ひて兼て攘夷の 勅諭も水の泡と相成り繪言如汗の大意分毫不相立ひて臣子の分如何哉と深く憂念仕ひ衷情より右事件お差移り同衆の決志素より不本意に座の間一先港前を避け退去ひ事お座の間理非分明にも相成り微志貫徹致ひ様仕度至願に座の有志の至情實御亮察宜敷取計ひ被成下は一同如何様の御處置相蒙り共遺憾無座の以上

元治元子年十二月

武田伊賀守

賀守正生判

加賀中納言様御内承原甚太郎殿

武田伊賀再々加州陣ニ建言ノ書

私共多人數引率は迄罷登り次第先般書付と以て歎願仕ひ通り聊素意上達仕度趣意係座の處何分當節の身柄に陥りひ上志願書等御取揚難相成段被仰聞承知仕ひ然る上の事實行違より移來ひ儀と申公邊係人數等打合ひ儀も有之誠お不相濟殊に軍装にて是迄潛行致し諸藩を動搖爲致ひ段實に天下の御大法を相侵し恐入ひ儀と奉存ひ儀お付尊藩軍門へ向け一同降參仕ひ何卒此段可然被仰立如何様にも御處置被仰付ひ様伏て奉願上ひ右様言上仕ひ上元來決死罷在ひ儀聊彼是申立ひ儀お無之ひ得共唯々先般奉歎願ひ通り如斯成來ひ事情に實お其謂も座の事にて曾て奉對公邊後聞く遺念を懷きひ不敬の舉動お無之ひ處今更空敷流賊の汚名を相蒙りひ段千載の後死るも遺憾の儀お座の間武門の情此段於尊藩別て御酌取宜敷係辨解被成下ひ様奉願ひ決死の一語他お申立ひ儀無座の以上

元治元子年十二月

武田伊賀守正生判

加賀中納言様御内承原甚太郎殿



武田伊賀一橋刑部卿ニ建白ノ書並ニ始末書

賤臣武田正生誠恐誠惶頓首百拜 一橋公の閣下ニ白臣等負罪の身を以て不憚嫌疑不顧天下大業軍裝衆を率ひ諸州致通行の段深く奉恐入ひ得共妨亂挑戦の意毛頭無之實ふ不得止事義の座の閣下存知も被爲在ひ通り逆臣結城寅壽の殘黨市川三左衛門佐藤圖書朝比奈彌太郎等の賊臣讒口を構ひ付臣故烈公の遺志を繼ぎ暴慢の醜夷を掃攘し國恩の万一と奉報誠忠と公邊へ盡度存寄有之れと奸徒百方金鉄一璞の勢於本國逐ふ數度迄戰爭の段同穴の鬩不本意千万の座の得共臣等因循罷在ひ戊午來從 天朝御下け被爲遊布告攘夷の勅諭悉く水の泡と相成綸言如汗の大義すら相立不申且醜夷益跋扈 神州の御國躰實み掃地の時合にも相移申ひ左ひての故烈公祖宗の遺志と繼述し東照公の風教を欽慕被遊の素志も泯滅無跡ふ到りひ條臣子的情遺憾無此上ひ固より粉骨碎身到底醜夷掃攘の微衷 天朝公邊へ盡度さ臣等の中情は座の勢情の始末別冊相認め入御高覽申ひ間願くは閣下亮察被下ひ様伏地待命ひ

始末書先年醜夷掃攘の勅諭御下ひ相成且昨年君公御上京の砌公邊へ補佐し攘夷の奏成功ひ様との被爲蒙 勅命 天盃頂戴遊され御寵遇不過之ひ得共未た其

效顯無之万一從被爲在ひて水府家の御瑕瑾無此上有志の族忠諫力爭盡粉骨公へ邊も歎願數度仕ひ得共未たは許容不被遊待命送日内兼て存知も被爲在ひ逆臣結城寅壽の殘黨市川三左衛門佐藤圖書朝比奈彌太郎等の奸臣當子五月中方國內に嘯聚逆謀を企居ひ處五月廿五日 天朝より鎮港談判可被仰出儀を相悟り左ひて兼ての逆意齟齬可致差急ぎ同月廿五日夜逆徒市川三左衛門始數百人弓炮鎗を携へ御關所と破り小石川邸に至り種々讒言を構へ執政始め諸忠良の臣を退職或は禁錮す奸徒熾は相成ひて烈公への忠節の勿論水府代々の教訓良法一時に滅泡する事を深く憂慮仕り水府に罷在ひ諸有志ら必死を極め小石川屋形に至り直ひ君公へ上言し奸徒市川三左衛門初め不殘水府へ追下し處諸有志其儘不殘江府に在留國元には婦人小兒のみ殘し置ひ處三奸人とも憤み中押して登城致し賞罰等我意の執行ひ金穀武器等自由採出し掛り役人制止ひ得共却て刀鎗を以て相劫し諸有志國許へ罷下りひは可致防戦手當し川々橋々を落し府下入口の都て炮臺を築き籠城の構を成し旨江戸表へ相聞ひ付有志一同より君公御下國にて直ひ取領被成下ひ様上言仕ひ得共一圓御採用無之不得止事公邊へ達し被遊御支族松平大炊頭殿を以て御名代にて水府表へ奸人御處置の儀御委任諸



有志一同爲守衛吉田藥王院へ到り右の段相達じの處奸魁市川三左衛門等承引不致のみならせ銃隊ふ命と大小砲致亂發じよ付於此方ハ素より戦争の用意の不得止事一先湊村へ遁れ再び砲術稽古場へ到り使を以て先方の隊長渡邊半藏等へ相諭じ得共又の砲發致じよ付此方無是非打懸及砲戰數日の處城内に祖宗御代々御神靈猶又御母寶眞芳院様初め御簾中諸公子様方御住居被遊ひよ付相憚り城の方を負ひ致砲發の處戦ひ果敢取不申再び湊村へ退き再議相立ひ内奸徒亦々讒を構へ公邊御目代田沼玄蕃頭殿初め諸侯の大兵を以て湊村へ致出張其中へ代官手附田中克之助と申者御目付戸田五助佐々井半十郎の内意を含み湊村へ参り此度の戦争取極度との存意にて事情を委細よ公邊へ申立無事相治りの様致度旨諸有志へ申談ト彦座ひよ付大炊頭殿自身戸田五助陣へ罷出事情委細申述べ公邊へ申立の様致度談判有之の得共諸有志申ひに戸田五助等は迄正義の者共不承萬一府下奸人共と謀合偽りて誘引し捕ひも難計ひ故一先病氣と稱し使を以て篤と虚實を見届け其後行て可然と諫争ひ處大炊頭殿被申ひに不行ひて兵と腹背よ受不相保とて諫争を不用遂よ大貫村へ到り戸田五助と對面事情分明よ被申述ひへ共至極係尤の至よ付從是江戸へ登り俱よ盡力一致の旨五助申ひ間大炊

頭殿にハ其夜松川陣屋へ一泊翌日係出立江戸へ罷登ひ旨奥御祐筆丹羽惣助係小人目付片岡爲助より書簡を以て知せ來り右よ付一同鎮靜仕ひ心得よ罷在ひ處公邊係人數の内折々砲發有之の得共不取合三十日餘り相待居ひ處願入寺地内よ屯致し居ひ奸徒の中より湊御殿地よ屯致し居ひ富田三保之助戸澤誠三福地勝右衛門矢野唯之丞谷晋太郎五人の者へ對談致度旨申來ひよ付川向水門と申所へ罷越談判致し以來往復兩三度よ及び由よハ共何等の儀を談トひ哉又致變心ひ哉私へハ一切不申聞尤も私ハ館山常光寺よ罷居ひ故實否相分り不申然る處十月廿一日夜湊御殿地屯集の内何り相變りひ儀致出來ひ趣よ付鎮靜の爲め湊御殿地へ私出張仕ひ處執政榊原新右衛門參政谷鉄藏同人悴彌次郎其外諸役人詰合新右衛門申にハ富田三保之助等五人の者川向へ罷越し府下奸徒の中久木直次郎笠井權六戸田藤三郎藤田健次郎谷徳之助等對談の處右の者ども申ひに我々共公邊出張の隊長へ和議の儀精々相談トひ處只今ハ相成ひてハ如何共取計ひ様無之ひへ共併大發の族ハ屯致しひもの云 浮浪の徒にハ大平山筑波邊へ異りひ由よハへ共浮浪の徒同様討取ひ儀ハ殘念の事よハ間從此方公邊係印赤根木綿相渡置ひ間是を禱さハ掛居ひへハ係構無之ひ間右よ付先非後悔降伏の者ハ湊御殿下天神



社内へ相集り居可申との趣右之段可然旨新右衛門申聞ひ付私答ひに夫の先達て大炊頭殿江戸へ罷登り節府下奸徒先廻り致し西宮寺村に待伏致し大炊頭殿主従へ遂強談直し水戸城中へ曳戻し大炊頭殿を爲致切腹従者四十人余首斬り謀畧と同術あり可有之中ひへ共新左衛門等信用不被致り依て不得止私儀館山常光寺へ立戻りひ處果して翌廿二日公邊人数より殿地屯集を致放火從公邊渡り相成印を懸居りひ者も一同砲丸被打殺り趣し付就て於此地可致死戰旨存ひへ共有志の者殿地居り分残らる被殺りて水府家の正義此時滅し義を唱へひ者絶て無之様成行ひし付祖宗及神靈且先君烈公へ奉對大不忠相當ひと存し翌廿三日館山常光寺を引拂ひ押して士衆を率ひ罷登りひ事あり座ひ以上賊徒武田伊賀等ヲ刑ニ處ス

○武田伊賀外二人斬罪

申渡 元水戸殿書院番頭彦右衛門父隱居武田伊賀右武田彦右衛門右武田伊賀次男大番組武田魁助 其方共儀元同藩市川三左衛門等申立ひ趣於主家採用相成て故同藩結城寅壽の存意貫き家政取亂様可相成と存過し致愁訴段に主家の爲筋と存込仕成す心得あり有之も慎中の身分下總國小金宿等へ出張追々同意の者共爲

鎮靜出張致す松平大炊を申欺き致隨從城内へ可立入旨仕成し其上常州那珂港其外所々を暴行し御討手並に主家へ敵對剩へ主家縁邊へ相便り可申と軍裝を以て所々横行國々爲致動亂惱農民の段御大法を犯し不容易及所業始末不恐公儀の仕方重々不届至極に付嚴科にも可被處の處追て右次第恐入の儀と心附き加州勢へ致降伏し付格別の御宥免を以て斬罪申付る者也

○山國兵部斬罪

申渡 水戸殿小性頭取山國淳一郎父隱居山國兵部 其方儀常州筑波山の賊徒攘夷を口實し設け野州大平山等へ致屯集し付鎮靜方申付ひ處却て賊徒へ致同意又元同藩市川三左衛門等申立の趣於主家採用相成ひて主人爲筋に相成間敷と心得其儘難差置存込折柄松平大炊より頼たる迪隱居慎申付受る身分にて附添歩行武田伊賀等へ隨從暴行常州磯の濱等へ屯集し御討手並に主家へ致敵對其上主家縁邊へ可相便と軍裝を以て所々横行國々爲致動亂惱農民段侵御大法不容易及所業始末不恐儀仕方重々不届至極に付嚴科にも可被處の處追て右次第恐入の儀と心得加州勢へ致降伏し付格別の御宥免を以て斬罪申付る者也

○山國淳一郎斬罪



中渡 右山國淳一郎 其方儀故右衛門尉位牌へ附添ひ水戸表へ罷越し途中戦争中にて市川三左衛門等の軍勢相集り城下へ難立入段の無余儀次第より有之共松平大炊等一同の相成其上右位牌榊原新左衛門へ引渡す上へ立戻り其段可申立處武田伊賀へ隨從新太郎俱々御討手並み主家へ致敵對其上主家縁邊へ可相便軍裝を以て所々横行國々爲致動亂惱農民段御大法を侵し不容易及所業始末不恐公儀仕方重々不届至極に付嚴科にも可被處の處追て右次第恐入の儀と心附き加州勢へ致降伏の付格別の御宥免を以て斬罪申付る者也

○長谷川道之助外四人斬罪

申渡 水戸殿先手物頭長谷川道之助 使番代役村島萬次郎 小十人目付平三郎 事井田因幡 源三郎事朝倉彈正 表右筆川瀬專藏 其々共儀其筋より申付を受け松平大炊へ附添ひ水戸表へ罷越上へ最初戦争より相成の節篤と事柄可相尋處常市川三左衛門等の所業主人爲筋より相成間敷と存居の折柄なり迎大炊一同武田伊賀へ隨從所々屯集し御討手並み主家へ致敵對剩へ大炊へ附添上へ同人致降伏節一同可罷在處無其儀猶伊賀一同御敵對致し其上主家縁邊へ可相使と軍裝を以て所々暴行國々爲致動亂惱農民段御大法を犯し不容易及所業始末不恐公儀の

仕方重々不届至極に付嚴科にも可被處の處追て右次第恐入の儀と心附き加州勢へ致降伏の付格別の御宥免を以て斬罪申付る者也

○田丸左京斬罪

申渡 水戸殿町奉行稻右衛門事田丸左京 其方儀常州筑波山其外屯集の者共爲鎮靜乍罷越却て右賊徒へ加るのみ成ぎ魁首の相成り所々暴行農民を惱し又元同藩市川三左衛門等の存意被行るの主家の爲筋不宜儀と存るの無謂儀の無之共右事件の付那珂湊等より集り罷在武田伊賀其外の者共一同の相成り御討手並み主家へ敵對其上重立多人數引纏め軍裝にて所々暴行國々動亂爲致し段侵御大法不容易及所業始末不恐公儀仕方重々不届至極に付嚴科にも可被處の處追て右次第恐入の儀と心附き加州勢へ致降伏の付格別の御宥免を以て斬罪申付る者也

○小野城男外八人死罪

申渡水戸殿側用人藪田小四郎事小野城男 林三平悻馬廻須藤敬之丞事伊藤健藏 大番組六右衛門悻三橋半六事山形半六 小曾請組根本慎平事岸新藏 目付同心畑彌平事小栗彌市 町同心川上清太郎 常州安食村竹内百太郎事竹中萬次郎 玉里村大宮社神主多氣平山城事瀧川平太郎 大宮村百姓内藤昇一郎 其方共



儀攘夷の素願貫き度於公邊因循の御處置振り一巳の過激より右御廟算相立様致し度迪同志の者多人數常州筑波山其外所々へ致屯集在々暴行亦り市川三左衛門等の存意被行てり主家又り領主の不爲と存るゝ無謂儀も無之とも右事件の付同國那珂湊へ群集罷在り武田伊賀其外の者と一同相成り度々御討手並り主家へ致敵對殊に軍装にて所々横行國々爲致動亂侵御大法不容易及所業始末不恐公儀仕方重々不届至極に付嚴科にも可被處の處追て右次第恐入り儀と心附き加州勢へ致降伏し付格別の御宥免と以て死罪申付る者也

右之外罪科の者難勝計其姓名茲に畧す

賊徒辭世ノ和歌並ニ妻子罪科差等

國分新太郎加州へ降伏の時

さのふけふ軒端の梅は宿をめてまたしもなれぬ鶯の聲

同人 辭世

春風や梅の香ひおはたされてなりの旅路お歸るふる里

武田伊賀妻とき四十八歳 辭世

かねて身のなれと思へと山吹の花お匂ひて散を悲しき

○同人悴桃丸 八歳 同 兼吉 三歳 武田彦右衛門悴三郎 十二歳

同二男金四郎 十歳 同三男熊五郎 八歳

右の丑三月廿四日浮新道所用屋敷より赤沼牢屋へ下り相成り翌廿五日於同所死罪申付らる とき桃丸三郎の三人に吉田村沼橋場所へ梟首お行はる也

○伊賀娘よし 十一歳 同妾むめ 十八歳

○武田彦右衛門妻いく四十三歳 辭世

引つれて返らぬ旅をゆく身にやまと心の道に迷はし

右三人永牢

○山國兵部妻なつ 五十歳 同娘ちい 三十歳 山國淳一郎妻 三十七歳

同娘みよ 十一歳 同娘ゆき 七歳 同娘くお 五歳

○田丸稻右衛門娘まつ 十九歳 同娘やえ 同娘むめ 十歳

數ならぬ身お後れし死出の旅

引つれて死出の旅路も花さかり

右何れも所用屋敷より丑三月廿三日赤沼揚屋へ下り相成り永牢







